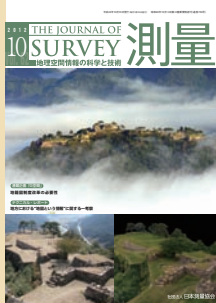


表紙 の 説明

竹田城 (雲海に浮かぶ「天空の城」)について



天守台を中心に三方の尾根に広がった竹田城の曲輪や石垣群は、円山川対岸の立雲峡から見るとその全貌がよく分かります。表紙上段はそこから撮影した雲海に包まれた竹田城跡の絶景です。表紙下段は天守台から捉えた南千畳の曲輪および石垣の画像(左側)と地上レーザスキャナで計測したデータから作成した鳥瞰図(右側)です。

■表紙画像のご提供先

「雲海に浮かぶ天空の城 竹田城」——和田山町観光協会事務局
〒669-5201 兵庫県朝来市和田山町和田山372番地1
Tel : 079-672-4003

「秋の南千畳の曲輪と石垣」——瀬戸島政博(筆者)
地上型レーザ画像——リーグルジャパン(株)
〒164-0013 東京都中野区弥生町5-11-29 フジビル2F
http://www.riegl-japan.co.jp

使用機器 : RIEGL社製 LMS-Z420i
(ステップ角度 縦横0.04°) 2カ所で計測

“天空の城”と言えば但馬の名城竹田城を思い浮かべる読者も多いと思います。この城は、表紙のように雲海に包まれた晩秋の絶景で知られています。

JR播但線竹田駅の背後(古城山353.7m)に城跡があります。この城の始まりは史料によって異なり不明な点がありますが、永享3(1431)年頃に但馬国の守護山名持豊(宗全)によって築城され、家臣大田垣氏が城主になったと伝承されています。竹田の地は、但馬街道と山陰街道が交差する交通の要所で、宿敵である播磨の赤松氏や丹波の細川氏への戦略的な拠点でした。

大田垣氏が数代続いた後、天正期になると織田信長の全国制覇のため、天正5(1577)年に羽柴(豊臣)秀吉により播磨・但馬攻略がなされました。その際に竹田城は秀吉の異父弟羽柴秀長によって攻略されました。その後一時、大田垣氏の居城となりましたが、天正8(1580)年再び秀長が攻略し、落城しました。これにより、織田方は生野銀山の確保と中国の毛利氏への抑えとなりました。

秀長は大規模な城郭普請を手掛け、その後は天正10(1582)年に秀長の武将桑山重晴が城主となり、さらに、天正13(1585)年には赤松廣秀に替わり、慶長5(1600)年9月の関ヶ原の戦いを迎えます。廣秀は関ヶ原の戦い直後の鳥取城攻めの失策から徳川家康の逆鱗に触れ、自刃、家康の命によって竹田

城は但馬村岡城主の山名豊国が没収し廃城となりました。

竹田城は中央部に本丸を置き、そこから三方に延びる尾根上に二の丸、三の丸、北千畳、南千畳、花屋敷などの曲輪を配した梯郭式縄張になっています(図-1)。

大手門跡(図-2)は門前に枅形(出撃や防備のための方形)を持つ出枅形構造の門で、見附櫓を設け、登城口を固く守っていた様子が窺えます。本丸は天守のほかに南北に二基の櫓を備えていました。自然石や粗割石を使用した本丸石垣には所々に巨石を積んでいます。

天守台は本丸より一段高く、その大きさは約11m×13mの規模で東側に張り出した少し歪な形になっています。この付近には穴太積(野面積)の豪壮で美しい反りを持つ高石垣を見ることができます(図-3)。また、野面積の粗削りな石垣が多いなかで隅部は算木積の技法が用いられ(図-4)、それによって石垣隅部の強度が増し、このような反りのある高石垣を構築することができたようです。

天守台から南千畳を望むと、緩やかな斜面上に石垣が連なる壮大な景観が広がっています(図-5)。同様に天守台から北千畳を望めば、尾根上に築かれた広大な曲輪跡が展開しています。

桜や青葉に彩られる春の竹田城とともに、晩秋の雲海に包まれた竹田城には寂寥とした美しさがあります。(瀬戸島政博)



図-1 本丸の遠景 (筆者撮影)



図-2 出枅形構造の大手門跡 (筆者撮影)



図-3 天守台 (筆者撮影)



図-4 算木積の高石垣 (筆者撮影)



図-5 天守台から見た南千畳 (筆者撮影)